

研究発表

海外における啄木研究・翻訳の動向

——英語圏を中心として——

Studies and translations of Takuboku-current trends abroad

CHIA-NING CHANG*

The aim of this paper is to trace the development of scholarship in the English-speaking world on the study of and translation activities regarding the works of Ishikawa Takuboku from the 1930s to the present-day. This is proceeded through the examination of English translations of Takuboku's various genres, particularly his most well-known *tanka* collections since Sakanishi Shio's pioneering work *A Handful of Sand* (1934) to Goldstein and Shinoda's *Sad Toys* (1977), followed by an analysis of post-war studies by scholars representing a wide spectrum of approaches and various shades of problem consciousness while at the same time sharing a common interest in the works and experience of Takuboku. This includes works by literary historians, intellectual historians, political scientists and anthologists examining Takuboku in the literary as well as in the intellectual and social context of his time. Divided into five sections -- "Pre-war Studies", "Translation Activities in the Post-war Period",

* CHIA-NING CHANG 〔現職〕 スタンフォード大学大学院生

“Studies in General Surveys and Histories of Japanese Literature”, “Specialized Works on Takuboku in the 1980s” and “Some New Approaches to the Study of Takuboku”-- the paper ends with a conclusion entitled “Future Perspectives about Studies on Takuboku in the English-speaking World” in which some observations on possible trends in the study of Takuboku in the years to come are presented.

坂西志保女史の先駆的工作によって石川啄木の作品が初めて英訳されたのは、1934年であった。1980年代に入り、30年代を始めとする英語圏における啄木研究の歴史を溯って検討してみると、先ずわれわれは、広汎にわたる啄木の文学上の業績が数多く英訳され、彼の言わば精神的遍歴とその文学的・思想的体験の学術的研究に、多様なアプローチ、解釈、方法論が採用されていることに心を打たれるのであるが、それに比べて、啄木を専門的に取り扱った基礎的研究書がずい分少いことにも驚くのである。『一握の砂』、『悲しき玩具』が最初に英訳されてから、すでにほぼ半世紀が過ぎ、その間、欧米の日本近代文学の研究者にとって、啄木は広く知られてはきたものの、彼が学術的関心を持たれる注目すべき人物になったのは、ごく近年になってからのことだと思われる。以下に「戦前の研究」、「戦後の翻訳活動」、「日本文学史の概説書に見られる啄木研究」、「1970年代における啄木に関する専門書」、「啄木研究の新しい問題意識」及び「英語圏諸国における啄木研究の今後の展望」という6節に分けて、1930年代から今日に至るまでの英語圏における啄木研究史を要約的に検討し、あわせて多少なりとも今後の啄木研究についても展望してみよう。

(1) 戦前の研究

坂西志保女史による『一握の砂』や啄木の他の短歌及び口語自由詩の英訳

は (Sakanishi Shigo (tr.) *A Handful of Sand*, Marshall Jones Co., Boston, 1934)、啄木の詩作を特別に取り上げて欧米の読者に紹介した最初の業績である。坂西氏は、啄木の作品に初めて出会う欧米の研究者のために啄木の年譜を付ける配慮を怠らなかったため、本書の読者は、啄木がその短い生涯において浪漫派感傷的詩人から、自ら公言した「社会主義者」へと、いかに急激にその文学的・思想的立場を転換していったかを一層明瞭に理解できるのである。啄木の詩歌を英訳するに際して、坂西氏は例えば『あこがれ』のようないわゆる浪漫主義時代の作品から選歌せず、『一握の砂』や『悲しき玩具』から選んだのであるが、これは後年、他の訳者が啄木の詩作を英語圏へ紹介する場合の全般的な方向づけをするのに決定的な指標を示したと言えよう。

坂西氏の訳業を除けば、1945年以前にはわずかに2書が啄木に言及しているだけである。宮森麻太郎の訳した『日本詩歌集』(Miyamori Asatarō (tr. & annotated) *An Anthology of Japanese Poems*. Maruzen. Tokyo. 1938) は、短歌2首を収録しているに過ぎず、国際文化振興会の編集した『現代日本文学入門』(Introduction to Contemporary Japanese Literature, 1902-1935, Kokusai bunka Shinkōkai, Tokyo. 1939) も、その序論で啄木にわずかに触れている程度で、本論で取り上げている69人の近代日本作家には入れていない。そういった研究状況は啄木に対する戦前の研究者の冷淡を端的に示していると言えよう。

(2) 戦後の翻訳活動

1950年代に始まる戦後期において啄木が欧米の読者に紹介されたのは、他の多くの近代日本文学作家と同様に、最も広く知られている作品の翻訳によってであった。当然のことながら、翻訳者の目を一番引いたのは『悲しき玩具』と『一握の砂』であり、彼の口語自由詩と『ローマ字日記』がこれらに続いた。1950年代には、前掲の2歌集から選ばれた短歌やその他の詩作が安田蕉村と宮森麻太郎によって英訳され、(Yasuda Shoson, Lacquer Box, The Nippon Times, Ltd., Tokyo. 1952). Miyamori Asatarō, (tr. and

annotated) Masterpieces of Japanese Poetry Ancient and Modern, Taiseido Shobo. Tokyo. 1956)、レクスロス (Rexroth, Kenneth. In Defence of the Earth, New Directions, Norfolk, Connecticut. 1956) や河野一郎・福田陸太郎両氏の訳業がこれに続き (Kōno Ichiro & Fukuda Rikutarō (ed. & tr.) An Anthology of Modern Japanese Poetry, Kenkyusha, Tokyo, 1957)、1959年には本多平八郎氏によって『一握の砂』、『悲しき玩具』の歌が専ら英訳された。(Honda, H.H. (tr.) The Poetry of Ishikawa Takuboku, The Hokuseido Press, Tokyo, 1959)

50年代の注目すべき仕事の一つに、ドナルド・キーン教授による『ローマ字日記』(Keene, Donald (Compiled & ed.) Modern Japanese Literature : An Anthology. Gross Press. New York. 1956) 抄訳があり、これはこの重要な作品の最初の外国語への翻訳であった。キーン教授は、『ローマ字日記』に注目した最初のアメリカ人の学者であり、欧米の読者は、キーン教授によってこの日記の重要性を教えられ、また、当時一般的であった明星派の浪漫主義に影響された情熱的詩人としての啄木のイメージや、『一握の砂』、『悲しき玩具』に見られる厭世的でニヒリスチックな歌人としての啄木像をかなりの程度に訂正されたのであった。この訳業によって、英語圏内の読者は、啄木の詩歌以外では最も重視すべきジャンルの1つの代表作とも言うべきこの作品を読む機会に恵まれたのみならず、それ以前の訳業では知ることのできなかった啄木の多面的な才能とその豊かな感受性の他の側面を鑑賞できる新しい次元を開かれたのであった。1956年にキーン氏の英訳が出版された後、この作品は、イタリア語にも訳された。^(註1)

60年代における啄木の詩歌の英訳は、タカミネ・ヒロシやカール・セサーなどの努力によって一層専門的業績になって、新局面を迎える時期になったのである。タカミネ氏が、啄木文学の理解と鑑賞に必要と思われる背景知識の詳しい解説をしてくれたので、英語圏の読者は豊潤で多様な特質を伴った啄木の詩作を味わえる条件を提供されると同時に、啄木の詩歌に膚で触れ

のような親近感を覚え、作品のモチーフ、また詩作と起伏に満ちた啄木の人生との関係などについて教えられるのである。(Takamine Hiroshi (tr.) *A Sad Toy : A Unique and Popular Japanese Poet—Takuboku's Life and His Poems*, Tokyo News Service Ltd., Tokyo, 1962; Sesar, Carl. (tr.) *Takuboku : Poems to Eat*. Kodansha International Ltd., Tokyo and Palo Alto, 1966) 坂西、タカミネ、セサーらの英訳の他に、『一握の砂』はロシア語と韓国語にも訳された。^(註2)

啄木の短歌の翻訳に限って言えば、1970年代における最も重要な成果はゴールドシュタインと篠田両氏の共訳による『悲しき玩具』の出版であることに疑いはない。(Goldstein, Sanford and Shinoda Seishi (tr. with an Introduction and Notes) *Sad Toys*, Purdue University Press, West Lafayette, Indiana, 1977)。ここまで来て初めて、194首の短歌の全訳に驚くほど詳細な注釈を伴った翻訳が現われたのであった。作詩法に関する啄木の考え方を探求したいと思う研究者なら、『弓町より』、『歌のいろいろ』、『硝子窓』、『一利己主義者と友人との対話』などのエッセイの検討によって得られた解釈を本訳に見出すのであろう。これまで断片的に扱われるに過ぎなかったか、もしくは年譜によって簡略に示されるだけであった啄木の伝記に関する情報も、本書では共感と愛着を込めて明解に述べられている。坂西氏の訳業が、それまで無名に近かったこの近代日本の歌人を、初めて欧米の読者に紹介する役割を果たしたとすれば、ゴールドシュタインと篠田両氏の仕事は、啄木の生涯と彼の短歌創作法に関して、基礎的な情報を提供し、それらの課題について、さらに掘り下げる研究の可能性を示唆してくれるのである。以上述べた『悲しき玩具』の英訳の他に、ロシア語訳及び韓国語訳も既^(註3)に出版されていた。さらに、啄木の詩作は、フランス語、ドイツ語、中国語、フィンランド語、トルコ語などにも翻訳された。^(註4)

(3) 日本文学史の概説書に見られる啄木像

英語で書かれた日本文学史の概説書においても、啄木の名は戦後期に入っ

てから一層頻繁に現われるようになった。もっとも、少数の文学史書を除いては、大抵の場合、叙述の序に簡単に触れるといった程度で、それ以上に丹念に扱われることはなかった。こうした概説書の著者たちは、啄木を土岐善磨が属する生活派の先駆者と見なしたり、あるいは啄木を『一握の砂』と『悲しき玩具』の作者として忠実に記録したりし、また、概説書の中には、その性質や議論の方向によって『あこがれ』や『時代閉塞の現状』にも言及していることがある。たしかに啄木の短歌を1、2首訳している文学史書は多いが、続けてその詳細な分析や創作背景について論じているものはごく稀である。また、ほとんどの場合、評論・書簡・日記・短篇小説など啄木の他のジャンルには触れていない。興味深い問題点を指摘している書もあるが、詳述するための紙幅を割いていない。ともあれ、多くの日本文学史の概説書の著者たちは、英語圏の読者に最も有名な啄木の短歌を知らせてくれ、彼の生涯と作品についての簡単な入門知識をある程度提供してくれた上に、伝統的な短歌詩型を駆使した啄木の作品の持つ爽やかな近代性を紹介して、歌人としての啄木の特異性に注意を喚起している。また浪漫主義の詩人として出発していた姿勢から社会主義者に変貌した事実などに注目している書物も少なくない。

(4) 1970年代における啄木に関する専門書

啄木に関する専門的な論文や研究書が書かれたのは、70年代に入ってからであった。キーン教授の論文『子規と啄木』(Keene, Donald. “Shiki and Takuboku” in “The Creation of Modern Japanese Poetry”, Landscapes and Portraits : Appreciations of Japanese Culture, Kōdansha International Ltd., Tokyo and Pals Alto, 1971) が、啄木を考察の主題として扱っているごく数少ない論文の一つであるばかりでなく、その論考の範囲がそれまで十分に検討対象として論考される機会の少なかった日記・小説・書簡といったジャンルを含んでいるので注目に値する。1979年に出版されたヒジャ・ユキヒト氏の業績は、英語圏の啄木研究に新しい段階が到来したこと

を明確に印すものである。(Hijiya Yukihito, Ishikawa Takuboku, Twayne Publishers, Boston, 1979)。ヒジャ氏の研究は、啄木のさまざまなジャンルを扱っていて、そのうちの幾つかのもの、特に評論と小説は、これまで然るべき注目が払われていなかった分野である。これまで本格的な研究対象となる機縁の全くなかった啄木の数多くの作品、例えば『葬列』、『病院の窓』、『鳥影』などの小説や、『林中書』、『ワグネルの思想』といった評論が、ようやく本書に取り扱われるのである。また『時代閉塞の現状』のように、本書で初めて詳しく検討されたものもある。岩城之徳・国崎望久太郎・今井泰子・小田切秀雄・窪川鶴次郎といった日本の代表的啄木研究家達の貴重な業績を吸収して、ヒジャ教授は、英語で書かれたものとして最も詳しく、かつ最も包括的な研究書を生み出すことによって、一つまとまりをそろえた啄木作品の全体像を一応欧米の読者に紹介しうるのである。最近、活字になった岩城之徳氏の論文は(“An American Collection of Western Poems and the Early Career of Ishikawa Takuboku”, *Comparative Literature Studies*, Vol. XVIII, No.2. June 1981, University of Illinois Press)、最近氏が函館市立図書館で発見した『Ebb and Flow』という啄木の書いた手帳の内容を紹介し、この手帳の制作に大きな影響をあたえたと思われるアメリカ人 Anna L. Ward の編集した詩集 *Surf and Wave : The Sea as Sung by Poets* (New York. Crowell, 1883)が、如何に文壇に踏み出そうとする当時の若き日の啄木を影響していたかを論じている。この論文によって、『あこがれ』の製作以前の啄木が、単なる蒲原有明・薄田泣菫・与謝野鉄幹・島崎藤村・上田敏などといった日本の詩人のみの影響を受けたという従来の定説にある程度の訂正が行なわれ、『あこがれ』の新しい位置づけが展開されるのである。

(5) 啄木研究の新しい問題意識

英語圏内における啄木研究に現われ始めた一つの重要な傾向は、思想史家・政治学者・文芸批評家達が明治及び大正時代の思潮ないしは社会的特徴を解明しようと企てるにあたって、ますます啄木の思想的歩みや作品に注目

するようになったことである。ヴィグリエルモ氏訳の『明治時代の日本文学』(Okazaki Yoshie (ed.) Viglielmo, V.H. (tr. & adapted) Japanese Literature in the Meiji Era, Ōbunsha, Tokyo, 1955) 及びトマス・C・スミスの論文は“Old Values and New Techniques in the Modernization of Japan”, Far Eastern Quarterly, Vol. 14 No. 3, May 1955)、啄木の日記・書簡あるいは『雲は天才である』という短篇小説を検討することによって、明治末期の知的・文化的風潮を理解するための洞察力が養われることを近代日本歴史の研究者に示唆してくれる。高坂正顕氏の編集した『明治時代の日本思想』は(Kōsaka Masaaki (ed.) Abosch, David (tr. & adapted) Japanese Thought in the Meiji Era, Pan-Pacific Press, Tokyo, 1958)、明治思想史において啄木を捉えようとした書物としては、1958年の出版以後、おそらく最も注目すべきものと思われる労作でありこれまで述べられなかった新しい啄木像を造り上げた著作とも言えよう。本書は、啄木を、与謝野鉄幹、晶子の文名の陰で文壇へ歩み始めた明星派の詩人としたり、あるいは『一握の砂』、『悲しき玩具』といった歌集を残した哀愁的、望郷の情に溢れた歌人として描く伝統的な捉え方をせず、当時の文芸的・思想的な流れに鋭敏に反応しつつつけた感受性の鋭い人物として論じた先駆的著作と言えよう。本書は、啄木という人物に示された重要性が単に一感傷的の歌人としての啄木像が示唆する範囲をはるかに越るものであることを、明治30年代、40年代の文化状況において、見事に立証したのである。高坂氏は、自然主義批判者としての啄木、国家と個人との関係といった問題を真面目に考察するよう当時の青年に強く呼びかけた思想家としての啄木に注目したのであるが、これは、啄木の比較的知られざる知的活動の側面を示すことになり、日本近代思想史における啄木の残した足跡に関して、一層公平な評価を下すのに功績があった。ことに重要なのは、啄木の作品を探究した高坂氏の方法に現われている彼の問題意識と、こうした研究方法が、以後の研究者を励まし、啄木という存在と彼の著作の意義をさらに分析する可能性を持つことである。

60年代の半ばにおける啄木のいわゆる批判的リアリズムの展開についてのシェアの研究は (Shea, G.T. *Leftwing Literature in Japan: A Brief History of the Proletarian Literary Movement*, Hōsei University Press, Tokyo. 1965) 高坂氏が啄木に抱いた興味を継続したものと見て良い。シェア氏は、啄木の関心が真の詩人の規準を立てることから次第に国家に関する諸問題の考察へ、文学と実生活の関係から現状を検討せねばならぬと確信した立場に至るまで推移して行く思想転換を輪郭づけている。彼は、また、啄木が批判的リアリズムの立場に立ち、「国家に支配されている大衆」に懸念しながらも、「大衆との観念的な結合をなしえたにすぎず」、啄木の社会主義への接近も、近代日本文学史上に特異な伝統を生み出すまでには熟さなかったことを指摘しているところは注目に値する。

『近代化に対する日本人の姿勢の変化』という1965年にプリンストン大学出版社より出版されたものに載せた加藤周一と丸山真男両氏の論文は、(Katō shūichi, "Japanese Writers and Modernization", Maruyama Masao. "Patterns of Individuation and the Case of Japan: A Conceptual Scheme", in Marius B. Jansen (ed.) *Changing Japanese Attitudes Toward Modernization*. Princeton University Press, Princeton 1965)、思想史の研究家、文芸評論家、政治思想史の学者にとって、近代日本の思想・文化・社会の枠組において啄木の作品と思想を分析しようとする際に、実に斬新な洞察と示唆豊かな方法論を提供してくれる。加藤氏は、鷗外、漱石、荷風と内村鑑三を中心にして、国権と民権との思想的衝突や個人と国家をめぐる諸問題を論じる際、啄木と荷風両者の大逆事件から受けた衝撃とそれに対してのそれぞれの反応の仕方を問題とし、啄木の幸徳秋水、アナキズムへの接近に注目している。丸山氏の論文は、近代化の過程に置かれた社会における人間の個性解放の諸類型の概念的成立と、それらの均衡や分布実態による社会及び政治体制とのそれぞれの関係を論じているもので、啄木を、言わば *associative individualism* の一人として捉え、自然主義の文学思想と質的に違っ

て、啄木が丸山氏の言葉を借りれば Individuation という類型に近いのだと指摘しているところに注目すべきと言えよう。

1969年のケネス・パイル氏の研究は、さらに別の角度から、啄木の後期の作品が、如何に日露戦争後の日本の青年層に、自国の文化の正体 (Cultural identity) を探る問題が迫っていたこと、また日本の国家的・文化的価値観に対して己れが忠誠をはたすべきか否かの選択を迫られて苦悩していた諸相を示唆しているかを、思い起してくれる。(Pyle, Kenneth B. *The New Generation in Meiji Japan : Problems of Cultural Identity. 1885-1895*, Stanford University Press, Stanford. 1969.) 同時代のアリマ・タツオ氏の研究は、『時代閉塞の現状』を注目し、自然主義批判者としての啄木の重要性を強調した。(Arima Tatsuo. *The Failure of Freedom : A Portrait of Modern Japanese Intellectuals*, Harvard University Press, Cambridge. 1969)、『はてしなき議論の後』が大正期の前期新人会の若き知識人に励みと影響を与えたとするヘンリ・D・スミス氏の指摘は、これまで日本の啄木研究においてさえも、あまりなされなかったものと言えよう。(Smith II, Henry Dewitt. *Japan's First Student Radicals*, Harvard University Press, Cambridge, 1972)。

ハルトゥニアン氏の論文は、文化と政治についての啄木の思想と、鷗外・漱石・高村光太郎の思想とを比較し、啄木が抱いた理想と大正文化のいちじるしい特徴との間の断絶の諸要因を検討し、明治末期の政治的・文化的枠組における啄木の位置づけを探ろうとしてきた啄木研究の傾向を継承しているものと見るべきであろう。

しかし、本節で触れた研究には、明治時代の知的・社会的・文化的状況を分析する際に、啄木を主要な研究対象として取り上げた論説がないだけでなく、啄木文学ないし思想の全体像を立てようとする意欲も見られない。以上紹介した諸論文は、多くの場合、明晰で、洞察力が鋭く、さらに啄木に関する研究意欲を鼓舞してくれるものであるが、啄木に一章全体を割いているも

のもなければ、長い充実した議論を展開しているものもない。勿論、その理由は、著者たちの興味の中心が啄木になく、他の特定の作家あるいは文学運動にあるためであったり（例えばアリマと加藤両氏の場合）、あるいは啄木以外の多様な思想史に関する課題に検討の中心を置いているためである（例えば丸山、パイル、H.D.スミスの諸研究）。にもかかわらず、多くの研究者達が、近代日本の社会的・思想的状況に関する多様な課題を論ずるにあたって、啄木の作品を、他の文学者と知識人と一緒に検討の対象として含むことの妥当性と重要性を一致して認めているのは、意義深いところである。つまり、純文学批評の枠に縛られず、文化的・社会思想的脈絡というさらに大きな枠組で、知識人や文学者の文学史的・思想史的業績を研究している研究者が最近盛んに論じている作家の仲間に、啄木が重要な意味において加わったことになる。近い将来、近代日本史、あるいは近代日本文学の研究者達が、こうした研究方法によってさらに充実した業績をあげることが期待される。

(6) 英語圏における啄木研究の今後の展望

坂西志保氏訳の『一握の砂』が世に出てからほぼ50年経過した現在、啄木の詩歌の英訳書は驚嘆すべき数になっている。しかし短歌以外のジャンルについては、既存の訳業のみでは、まことに寂しい限りである。例えば啄木の思想の浪漫主義から社会主義への移行を理解する際に不可欠になる彼の注目すべき評論は、未だ十分に、かつ体系的に翻訳されていない。同じ事は彼の書簡についても言える。小説に関して、『二筋の血』、『道』、『我等の一団と彼』といった作品が既に中国語、韓国語に訳されたが、^(註5) 英訳は一つもないのである。色々な意味で注目すべき啄木の幾つかの小説が（例えば『鳥影』、『我等の一団と彼』）これから英訳されることを望んでいる。

啄木研究の面では、啄木が、漱石・鷗外・荷風・高山樗牛や日露戦争後に登場してきた自然主義の作家とともに、当時の文化状況と社会思潮において、彼の文学上あるいは思想上の発展の一局面だけでなく、いわゆる浪漫主義以後の思想的遍歴全般にわたって包括的視座から、思想史研究家や文学評論家

によって引続き検討されることが期待される。また、啄木の詩作をめぐる諸問題に、種々新しい角度からの検討が加われば、日本詩歌史上で啄木の占める位置についての理解が深まるであろう。

比較文学あるいは比較文化の視点から、ニーチェ・ワグナー・バイロン・トルストイ・クロポトキン・ゴーリキイ等々の思想家や文学者と啄木との関係といったテーマの研究は、まことに意義深いものであり、同時に、自我の概念・芸術と社会とのかかわりについての啄木の思想の展開を理解することにも繋がるだろう。

石田六郎、国崎望久太郎氏などの日本人の学者がすでに採用している精神分析学あるいは実存主義哲学などの観点から啄木の作品と思想を検討する新しい研究方法が、将来、欧米においても啄木研究家の試みるところとなろう。

注

1. 詳細については、The International House of Japan Library (Comp.) Modern Japanese Literature in Translation : A Bibliography, Kōdansha International. Tokyo, New York and San Francisco. 1979 の82ページを参照。
2. 前掲書82ページ及び武田勝彦「海外における啄木研究」国文学・解釈と教材の研究・第23巻第8号『石川啄木手帖』所収、1978年6月、202ページを参照
3. Modern Japanese Literature in Translation : A Bibliography82ページを参照
4. 前掲書82ページ～84ページ参照
5. 前掲書82ページを参照

討議要旨

ロバート・ブラウワー氏から、はたして啄木は世界的にみて偉大な歌人か、との質問があり、発表者から、偉大ということの基準をどのように規定するかで違ってくるが、自分にとっては啄木は偉大どころも、そうでない部分も両方持ち合せた歌人だと思ふとの返答があった。

リ チャン・キム氏から啄木は偉大というより天才的な詩人だと思ふ、彼

はエセーニンと似ているとの感想が発表され、さらにソ連における啄木の翻訳について紹介できる用意があるかとの質問があった。発表者から出版予定の本（角川「近代文学鑑賞講座石川啄木」）に載せる翻訳リストにはロシア語訳のものは収録していないが、講談社「近代日本文学翻訳書目」にはロシア語訳のリストもあるので、それを参照すればよいとの返答があった。